

6. 主なモニタリング調査と成果

(水研センター関係)

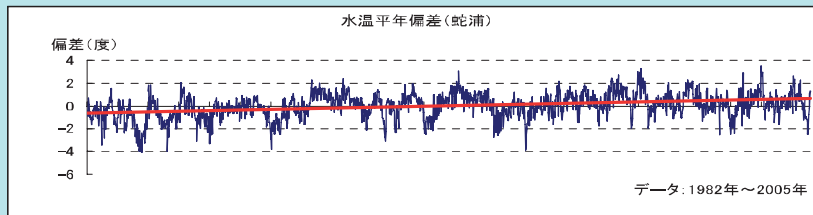
(1) 漁海況に関する調査

- 調査目的：水産資源の合理的利用と操業の効率化を図る
- 調査内容：日本海2定線について沖合100マイルまでの21点、太平洋3定線について沖合160マイルまでの32点の定期海洋観測
- 主な成果：
 - ・沿岸15ヶ所の定地観測結果や漁獲状況とあわせ、半月報（ウオダス）を月6回発行
 - ・沖合の水温について長期の経年変動傾向を把握
- 現在の活用状況
 - ・漁海況速報ウオダスは関係機関に送付される。HPにも公開されている。
 - ・長期の水産資源研究にも活用される



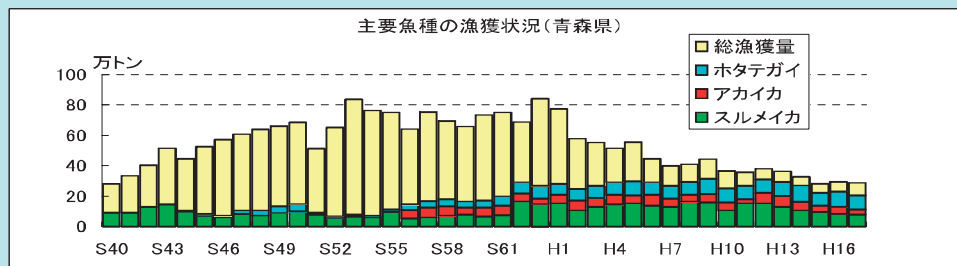
(2) 定地水温に関する調査

- 調査目的：沿岸環境、増養殖環境の把握
- 調査内容：県内13ヶ所及び陸奥湾内3ヶ所において毎日の水温データを収集する
- 主な成果：深浦では60年間のデータが蓄積された。長期的な水温変動傾向を把握
- 現在の活用状況：漁海況速報ウオダスに掲載される。HPにも公開されている。



(3) 海面漁業漁獲統計に関する調査

- 調査目的：県内の水産業の実態を統計的に明らかにし、適確公正な行政運営の基礎資料を得る
- 調査内容：漁協、漁法、魚種、月別の水揚数量及び金額
- 主な成果：青森県海面漁業に関する調査結果書（属地調査年報）を発行
- 現在の活用状況：資源管理、資源動向の把握、解析資料として活用



(4) スルメイカに関する調査

○調査目的：日本海及び太平洋海域の資源状態や分布、回遊、生態などの生物的特徴並びに漁場環境を明らかにするとともに、いか釣り漁業の経営の安定に資する

○調査内容：日本海及び太平洋海域において漁獲試験及び海洋観測を行う

○主な成果：

- ・日本海では平成元年以降、資源水準は高いが、最近では資源の増減が大きい変動期に入ったといわれている。近年の不調は冬季発生群の水準低下によるものと推察された。
- ・太平洋では冬季発生群に頼るところが大きく、その豊度が大きな漁獲変動要因になるものと推察された。



○現在の活用状況：

- ・スルメイカの漁場形成動向の把握や資源の動向把握
- ・当業船への漁獲情報の即時提供や長期予報の作成

(5) アカイカに関する調査

○調査目的

太平洋沖合に広域に分布するアカイカについて漁場探索を行い、群れの分布、回遊、生態などを明らかにし、いか釣り漁業の経営の安定に資する

○調査内容

太平洋海域において漁獲試験及び海洋観測を行う

○主な成果

- ・北上期の回遊パターンについて、暖水の張り出し方との関係付けができた。また、リモートセンシングの利用によりアカイカの北上経路の推定の可能性が広がった。
- ・南下期の分布にはこの海域のいろいろな水塊が影響しており、それらの把握が南下経路の推定に重要であることがわかった。



○現在の活用状況

- ・アカイカの漁場形成動向の把握
- ・当業船への漁獲情報の即時提供や長期予報の作成

(8) 陸奥湾の貝毒に関する調査

○調査目的

・陸奥湾と沿岸域で生産される主要二枚貝の毒化動向を監視，安全性を確保し，食中毒の未然防止，計画生産を図る

○調査内容

・ホタテガイ定点調査(2点，貝毒性・有毒プランクトン出現量，毒化期週1回・年間35回以上)

・全湾調査(6点，有毒プランクトン出現量，月1回)

・二枚貝定点調査(2点以上，貝毒性，毒化期週1回，年間18回以上)

○主な成果

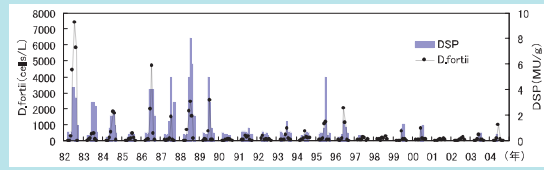
・ホタテガイほか二枚貝の毒化と有毒プランクトン出現動向把握，出荷自主規制措置により食中毒発生防止

・機器分析により毒成分，蓄毒・減毒過程解明，毒化予測手法開発

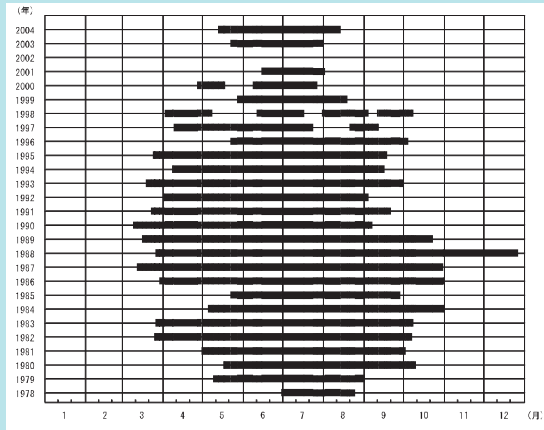
○現在の活用状況

・関係機関への調査結果の通報・周知

・貝毒発生状況速報（ホームページ）



陸奥湾のホタテガイ毒化と有毒プランクトン出現動向



陸奥湾の養殖ホタテガイの出荷自主規制期間

(9) 陸奥湾ほたてがい天然採苗調査

○調査目的

陸奥湾におけるほたてがいラーバの発生状況等を把握し，ほたてがい養殖業の持続的且つ安定的生産を図る。

○調査内容

母貝調査(湾内8地点 12月～5月)

ラーバ発生調査(湾内50地点 4月～5月)

ラーバ付着状況調査(湾内23地点 5月～6月)

○成果

毎年，養殖業者へ情報を発信し，種苗の安定的確保を通じ，ホタテガイの安定生産を確保している。

○現在の活用状況

陸奥湾内各漁協へ採苗速報，養殖管理情報を発信採苗情報会議の開催

